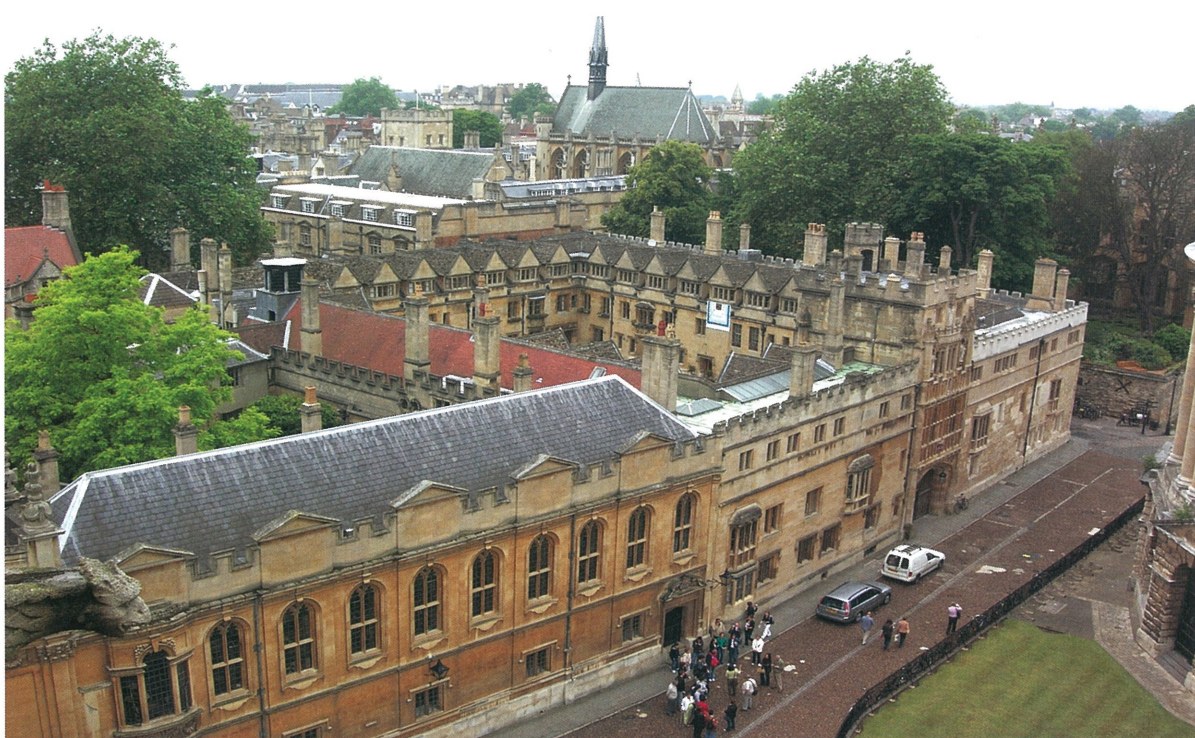


みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

英国に行って思い出したこと
(変わるネパールと変わらぬネパール：
グローバル化した世界に暮らす, 第21回)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 真木人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5115



エリートを輩出してきたオックスフォード大学のカレッジ（学寮）（2005年）。

変わるネパールと変わらぬネパール

——グローバル化した世界に暮らす——

第21回

6月末、英国のオックスフォード大学で開かれた研究集会「南アジアにおける運動と市民社会」で、ネパールのマグル人の民族運動について発表してきた。主催者は同大学の社会人類学者で、ネパールのネワール人社会を研究するゲルナー先生だ。彼は昨年私が勤める「みんぱく」で講演をしてくれたが、その時、大阪を訪ねるのであれば会ってみたい人がいると仲介を頼まれた。それは、校方・交野国際奉仕活動協会（HIKIVA）というNPOの役員であった。

彼がHIKIVAを知ったのはネパールにおいてだ。調査の過程で、同会がネワール民族運動の活動家、故ジャガット・スンドルの名を冠した私立小学校を全面的に支援しているのを知ったのだ。1990年に創立した同校は、主にネワール語で授業をすすめ、熱心な教員が先進的な民族教育を試みている。民主化した1990年、ネパールでは新憲法で「初等教育に限り母語で教育を受けさせる権利」が認められた。だが、ネパール語の教科書しかなかった当時、その実現はどの民族にとっても難しく、同校はその意味で先進的だった。

彼の関心は、日本の支援者がこの学校の特異性と、もっと言えば同校の運営が極めて政治的な運動であることを認識したうえで援助しているのかにあった。そこに子供を入学させている父兄がそ

うであるように、支援者もそうした事情を知らないのでは、というのが彼の推測だった。

だが、面会にきてくれた役員の言葉は予想を超えるものだった。「ネワール語教育に傾くことは常に激論になっている。HIKIVAとしては同校にネワール語だけでなく、ネパール語や英語でも授業をするよう勧めている」。さらに役員は「民族教育に熱心な先生のなかには、自分の子供は他所の英語で教育する学校に入れている人が少ない。その話を持ち出せば、彼（彼女）らは反論できない」と言うのだ。そこには民族語の習得だけでは進学や就職が覚束ないという、理想と現実のギャップがある。そして、同会が民族教育や宗教文化の大切さを認識しながら、現実生きていく子供たちの将来を見据えていることがわかる。

これを聞いたゲルナー先生が少なからず驚嘆していることは、私にも伝わってきた。それは日本のNPOや市民のレベルはあなどれない、という印象であつたろう。英国と日本における市民の関心やNPO、それを支える高等／社会教育の普及の異同について考えさせられる出来事だった。

英国に行って思い出したこと

写真・文◎国立民族学博物館助教授 南 真木人

1961年、札幌生まれ。筑波大学大学院修了。専門は文化人類学、南アジア研究。主要共著／『〈都市的なもの〉の現在』（東大出版会 2004年）、『嗜好品の文化人類学』（講談社 2004年）、『エスノ・サイエンス』（京大出版会 2002年）など。